

けりとめづらかにおぼさる。

〔空穂物語藏開下〕いせよりきぬもてまいれる、まどころにくぼてなどさす、山よりさかきもてま
いれり、

〔空穂物語國讓上〕か、るほどに、そん王の君藤つぼにあるゆふ暮に、かははなれて、くろき水おけ
のおほきやかなる、よついつ、かさねて、女どもさしいれてゐぬ、つぼねの人々あやしき物かな、
御せんにかゝる物を、さしいれていぬるとてみれば、おほきなるくぼてを、まろきくみしてゆひ
て、いつ、さしいれたり、とりいれたれば、ほどはをけのおほきさなり、あけてみれば、ひとつには、
ねりたるきぬを、いゐもりたるやうにいれたり、いまひとつには、あやをおなじやうにいれたり、
いまひとつには、かつを、さけなどのやうにて、ちんいたり、くぼてのふたに、なま女にて、け
ふならむ、からうして一つづ、のりつかひして、くまにはなどる、

ねぎごともきかずなりにしかさまには神のおほかるくぼてそでとぞ略下

葉盤
名稱

〔新撰字鏡草〕萩二字上同、 薺比良天、

〔倭名類聚抄十三〕葉手祭 漢語抄云、葉手比良天、

〔箋注倭名類聚抄五〕按葉手、亦恐非漢語、

〔類聚名義抄八〕葉手ヒラテ

〔南海寄歸傳二〕九受齋軌則

然其別者頗兼三淨耳、並多縫葉爲槃、寬如半席、貯粳米餅一升二升、亦用爲器、受一升二升、擊向僧
處、當前授與、次行諸食、有三二十般、此乃貧窶之輩也、

葉盤初見

〔日本書紀三〕戊午年十有一月己巳略中更遣頭八咫鳥召之略中次到弟磯城宅、而鳴之曰、天神子
召汝、怡矣、過怡矣、過時弟磯城、慄然改容曰、臣聞天壓神至、且夕畏懼、善乎鳥汝鳴之、若此者歟、即作葉。